

知の先達たちに聞く (13)

——加藤博先生をお迎えして——

2018年11月9日(金)、加藤博先生を京都大学にお招きして、「知の先達たちに聞く——加藤博先生をお迎えして——」と題して講演会を開催した。加藤先生は、中東社会経済史、イスラーム社会論の草分けとして、長期的パースペクティブから中東地域の経済・社会の動態の解明に取り組んでこられた。その成果は、『私的土地所有権とエジプト社会』(創文社、1993年)、『文明としてのイスラーム—多元的社会叙述の試み—』(東京大学出版会、1995年)、『アブー・スィネータ村の醜聞—裁判文書からみたエジプトの村社会—』(創文社、1997年)、『イスラーム世界の危機と改革』(山川出版社、1997年)、『イスラーム世界論—トリックスターとしての神—』(東京大学出版会、2002年)、『イスラーム世界の経済史』(NTT出版、2005年)、『「イスラーム vs. 西欧」の近代』(講談社現代新書、2006年)、『ナイル—地域をつむぐ川—』(刀水書房、2008年)、『イスラーム経済論—イスラームの経済倫理—』(書籍工房早山、2010年)、『ムハンマド・アリー—近代エジプトを築いた開明的君主—』(山川出版社、2013年)などの数多くの著書にまとめられている。

「マテリアリストにとってのイスラーム」と題されたこの講演会では、加藤先生のご研究と常に隣り合って存在してきた「イスラーム」とどのように対峙してきたのかについて、学生時代の出会いからその後の研究におけるイスラーム社会経済論の展開にいたるまで、一つの貴重なライフヒストリーとしてお話をうかがうことができた。そこで語られる滋味溢れるエピソードからは、歴史と現在、ミクロとマクロを常に往還する中で独創的な成果を挙げてこられた加藤先生の研究遍歴の舞台裏を期せずして垣間見ることができた。

以下、講演会記録に移る前に、加藤先生の略歴を記しておきたい。先生のご業績については、講演会記録の後に記載した。

加藤博先生——略歴——

< 学歴 >

- 1974年3月 一橋大学商学部卒業
- 1974年4月 一橋大学大学院経済学研究科修士課程進学
- 1976年3月 同 修了
- 1976年4月 一橋大学大学院経済学研究科博士課程進学
- 1977年10月 カイロ大学留学(1979年6月まで)
- 1980年3月 一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得
- 1983年12月 一橋大学大学院経済学研究科より博士号を取得

< 職歴・研究歴 >

- 1980年4月 東京大学東洋文化研究所助手
- 1985年4月 東洋大学文学部(教養課程)人文科学科専任講師
- 1988年4月 同 助教授
- 1990年4月 一橋大学経済学部助教授
- 1991年4月 一橋大学経済学部教授

- 1993年4月 日本学術振興会カイロ研究連絡センター派遣員(1994年3月まで)
1997年4月 国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授(併任)(2002年3月まで)
1998年4月 一橋大学大学院経済学研究科、経済学部教授
2012年4月 一橋大学名誉教授ならびに一橋大学大学院経済学研究科特任教授(2014年3月まで)
2014年4月 一橋大学名誉教授 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所フェロー(2018年3月まで)

マテリアリストにとってのイスラーム

私は社会経済史という物質生活の歴史を専門にやってきました。しかし、人文社会科学は人間を研究対象にするわけで、アラブや中東を専門にするならば、そこでのマジョリティであるイスラーム教徒と対峙せざるをえない。そこで、当然イスラームという宗教に興味を持たざるをえなかったのですが、私はイスラーム研究者ではありません。

ということで、今日は大変に楽しみというか、覚悟を持って参りました。イスラーム研究の拠点の一つに乗り込んで、専門外のイスラームについて語ろうというのですから。「マテリアリストにとってのイスラーム」という講演のタイトルは、そのあらわれということです。



今日ここに来たのは、自分の専門の研究領域で知りえた事実を紹介するということではなく、社会経済史という物質生活の歴史に興味をもってきた私が、専門研究の過程でイスラームをどのように意識し、問題にしてきたかを、裏話を交えながら、ざっくばらんに話すためです。そのため、話す材料は皆様、当然知っていることばかりで、また、自分の無知をさらすことになるかも知れません。それでも、話が若い人にとって、これからの研究において少しでも参考になればと思っています。

配付したのは、講演のレジюмеではなく、講義のように言い放しでは頭に入らないでしょうか、何を話しているかを確認するための話の材料を列挙したものです。私の備忘録といってもよいかもしれません。

さて、私の話は四部構成からなっています。第一部では、「なぜ老人は繰り返しが多いのか？」という枕詞から始まり、講演のタイトルにあるマテリアリストという意味を説明するなかで、社会経済史研究を志した私がなぜ、イスラームにひかれるようになったのかをお話します。

第二部では、そのイスラームと、私がどのように対峙したのかをお話します。私は歴史研究者として、「事実」の面白さにひかれてここまできたのであり、大袈裟な方法論を意識したことはありません。しかし、研究者である以上、なにがしかの研究姿勢はもっています。それは、ミクロな研究とマクロな研究の際限のない行き来です。それを説明します。

第三部では、恐らく本日のメインテーマになると思いますが、そもそもなぜ、私がイスラームに興味を持ったのかを、その出会いから説明します。私が社会経済史という物質生活の歴史に興味を抱いた経緯については、2001年という昔に書いたものですが、お配りした「多元的歴史叙述をめざして」(『民博通信』no. 93)というエッセイを読んでください。